

春燈

2017 October

10月号



主宰の句

安立公彦

何時よりの俳句談義ぞ暑氣払

窓ちかく来鳴く雀や秋近し

朝顔の白きを咲かせ修道院

荔枝よき実りを見する残暑かな

『浅草風土記』読むや露けき窓明り



成瀬櫻桃子の句

おだやかに過ぎし一日や夕ひばり

『風色』昭和四十八年

『風色』においては、ご長女美菜子様を思ふ櫻桃子先生の嘆きの句が多く、深く読み手の心に刺さってくる。そこへ現れたこの一句がふと心に安らぎを与えた。

親としての苦しみは計り知れない。しかし全てを受け入れ心静かに過ごす幸せの時もあったはずだと信じた。ほほえみ合つてあたたかな時間を過ごした春のひとつ。そんな日は夕方のひばりの澄んだ声も耳に届くのだ。

太田佳代子

成瀬櫻桃子の句

脳天に神の鉄槌流れ星

『素心』昭和五十六年

神の思いと人間の思いは、時として大きく食い違ふことがある。

流れ星は、宇宙からのメッセージ。その一瞬、はっと己の過ちに気付かされた。

目に見えない神との衝撃の出会いである。

愛娘の美菜子さんのように「素心」で生きられるなら俳句は、自ずと祈りになる。

荒井 慈

燈下集



○ 青柳雅子

香水やまだお若いといふ齡
妻の座に定年ほしき濃あぢさゐ
子子の世に出るまでの浮き沈み
脱皮して脱ぎつ放しの夏衣 (鈴忠)
ほうたるの絶えて久しき切通

○ 木多芙美

そこにゐるだけでうれしや日焼の子
齡かさね願ひ小さし星祭
衣ずれの音してゆふがほ開きけり
かなかなや今日といふ日はけふかぎり
滝壺のせめぎや水の性と精

○ 小張志げ

一つ葉や眉引くだけの朝化粧
半玉の衿白粉や半夏生
青蔦やときをり開く鬱の窓
四万六千日欲に肩凝る夕べかな
穀象や米搗きし日の一升瓶

○ 太田慶子

表札のはづされてをり濃あぢさゐ
夕立の庇をゆづり合うてより
夕焼や石屋に並ぶ石仏
一言地蔵に願ふひとこと沙羅の花
夏の月記憶の糸をたぐりけり

○ 江 草 礼

乱れゐる地球の鼓動雲の峰
遠雷や水車は眠く回りをり
頤の固き結び目風の盆
誰彼の転びし話つづれさせ
イソップの知らぬ火蟻ときりぎりす

○ 臼 杵 游 児

碁に負けて帰る病室竹夫人
子規と烏鷺試す一局蚊遣焚く
返り梅雨狭庭早くも生氣帯ぶ
久しぶり食欲覚ゆ冷奴
五体皆他人に任せて髪洗ふ

○ 岩 永 は る み

子の部屋に残るアルバム夜の秋
夕立の校庭叩く匂かな
ていねいに掃く軒先や江戸風鈴
夫の吹く草笛夫の音なりけり
羅の裾しばらくは風のもの

○ 林 紀 夫

七月や地球の鼓動緩びなく
十一や山の湯宿の通し土間
戸定邸の茅葺門や黒揚羽（松戸二句）
釘隠の葵の紋や夏館
梅雨明や陰を求むる己が影

○ 割 田 容 工

紅蜀葵わが胸に湧く母郷の風
朝の散歩唐撫子のかさね色
遠まはりす薔薇の館の令夫人
七千本の薔薇園に立ちつくす
朝涼の散歩の余祿鳥語かな

○ 中 野 さ き 汀

巴里祭内なる胸の燃ゆるかな
投げ銭にピエロのキッス夏の雲
その闇へ点してひと夜恋ぼたる
知らぬ振りするも情けや絹扇
亀が首ぐんと伸ばせる大夕焼

○ 成田なな女

風出でてゆさゆさゆるる今年竹

十葉の十字の花の香りけり

はるかなる山に虹立ちぬたりけり

先立ちて犬の歩ける夏野かな

霊山をつつみて余る夏野かな

○ 栗原完爾

献血の声かけらるる駅西日

ひと恋ふは咎にはあらず心太

青あらし耳のおほきな少女過ぐ

夕凧や信号ながき交叉点

惑星衝突あるやも知れず蟻の列

○ 小菅礼子

新居探しか軒下二羽の夏燕

田舎なればの樂しき幸せ梅拾ふ

小鳥影見かけぬ庭の小暑かな

細々と気になる声の土用かな

予定表書込み多き大暑かな

○ 生田高子

師を語る志らく秋夜の丸眼鏡

新豆腐桶にたゆたふ夕厨

夕鯛の思はぬ近さ暫し聴く

風少し冷たくなりし花野かな

石垣に登りたがる子猫じやらし

○ 本多遊方

六道の何処に通ず蟬の穴

蟬鳴いて三世の空を繋ぎけり

空蟬や墓の継承権放棄

蟬の殻ボルダリングの元祖かな

新旧の卒塔婆差し替へ夏果つる

○ 武田巨子

松蟬に不断の鉦の間合かな

風起し風にくづる蓮華かな

散り蓮華一枚葉母の忌なり

炎天の飛行機雲の十字かな

雨垂れの涼しき音に寝落ちけり

当月集

安立 公彦選



○ 永井恵子

はたた神間遠くなりて夜の更くる

涼風の真直ぐに抜くる豊の間

町名に残る藩の名水を打つ

盆提灯悲しみ色に吊られをり

迎火を焚く門前に闇せまる

○ 荒井ハルエ

声かけて路地に水打つ佃島

大川の風も一品船料理

銀河系の片隅にゐて端居かな

直訴状の墨の乾きや小判草 (宗吾壘句)

宗吾父子の処刑場跡蟬時雨

○ 持田信子

神の手に委ぬる我が身百日紅

手術後の歩くりハビリ燕の子

開拓村裾野畑のキャベツかな

女子会の笑ひあふるる夏座敷

風鈴の明珍火箸利休の音

○ 海村禮子

炎昼を杉山の脂匂ひけり

虫干や亡き人の物多かりし

羅や病みて足より老ゆる身の

思ひごとひたすら祈る木下闇

夏草や幾度の別れ越え来り

○ 横山さくら

見上ぐれば絵に書いたかに夏の雲

読み掛けの本の葉や涼新た

立秋やそつと歩みを早めつつ

鱗雲ため息空に消えにけり

新築の家に一輪秋ざくら

春燈の句

安立 公彦選

書齋めく我が食卓や秋隣

兵庫 古川 幸子

門火焚く庭石に置く素焼皿

藍染の絞りめ解く今朝の秋

元気かと問はれ残暑の背を伸ばす

梅干すや三日三晩を下部とし

千葉 大湊 栄子

棚経の僧やバイクを飛ばし来る

誦経する僧まだ若き盆会かな

身を正しほのと病みある生身魂

雲の峰スカイツリーと競ひ合ふ

東京 山口 地翠

夏の富士白雲従へ雄々しけれ

雲の峰形さまざま伊豆の空

故郷は夏鷺の声しきり

大夕焼竜宮うつす利根川面

埼玉 茂木 なつ

虫干や『枕草子』ひろひ読み

朝涼や織月武甲際立つる

昏れなつむ青田をわたる鷺や二羽

南瓜色の月を仰ぐや母の忌来

富めるとも子宝持てぬ敗戦忌

みの虫の孵化の滝なす光かな

さざえ堂賊進入や放屁虫

母在りし日に戻りゆく茅の輪かな

浴衣の裾端折る若衆の豆絞り

蛭や指の触れたる別れ橋

蓮池や傾ぎつつ来る女傘

梅雨入や雲に隠るる佐姫山 三瓶山

島根 土江 比露

放牧の牛の反芻夏わらび

過ぎてゆく風に玉解く芭蕉かな

コテージの木椅子に初夏の風の音



余言

安立公彦

涼しさを遠まなざしの道の神

西川 保子

一読、町外れに残る古い道筋を思い出す。舗装こそされているが、辺りに人家は無く、ふり向くと遥かに街の建物が灰仄見えるという、誰しもが持つ風景の一つである。

その道の傍らに、ひと所こんもりとした茂みがあり、樟の大樹の下に一基の道祖神が立っている。行路の安全を守り、邪霊を防ぐ塞の神である。その小振りな道の神の「遠まなざし」が実によく効いている。平易な表現の中に、語りかけるような「道の神」の風姿がみごとだ。

あさがほの明日咲くつぼみ敦の忌

佐藤 信子

敦忌は昭和六十三年七月八日。既に二十九年の歳月を経ている。七月十日が密葬、二十一日が春燈葬。密葬のとき、家から霊柩車まで担いだ柩の軽さが今も忘れられない。春燈葬の日、目黒の祐天寺は人で一杯だった。作者にとっても忘れられない日であったと思う。

「朝顔」は初秋の季語だが、今では夏咲く花として多くの人に親しまれている。この句、「明日咲くつぼみ」に季感の捉え方の絶妙の良さが表現されている。

四万六千日欲に肩凝る夕べかな

小張 志げ

「四万六千日」には「鬼灯市」の別称もある。七月九・十日の両日に浅草寺の境内に立つ市。この日参詣すると四万六千日の功德があるといわれている。四万六千日を年数に直すと一二年。何とも奥深い欲である。

そういう背景を元にこの句を見ると、そのユーモラな表現に俳諧味を感じる。「欲に肩凝る」がいい。世に五欲という。眼耳鼻舌身の五境に対する欲望。「肩凝る」はこの「身」に相等する。根拠のある中七である。

六道の何処に通ず蟬の穴

本多 遊方

まず「六道」について。辞書にはこうある。「衆生（ここでは人）が善悪の業によって赴き住む六つの迷界、すなわち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」。この内「人間」はじんかん、即ち世間を指す。初めの四つの迷界は非惨すぎる。また「天」は次元を異にする。

蟬は地上の生活は一週間ほどだが、幼虫は土中に十年近

くいて蛹となり地上に出る。その跡には小さな穴が残る。作者は僧籍にある身。或る日、蟬の穴を見て、「六道の何処に通ず」の思いを得る。宗教と哲学に渉る思考だ。しかし一句を通して見ると、蟬への哀れさが浮かぶ。

ほぼづきを含み来世もまた女

諸岡 孝子

私たちがこの世に生を享けるのは、私たちの意識以前の選択である。男としての性、女としての性、それぞれの選択は私たちの存在の外にある。その選択の采配を振るのは「神」という想定上の存在としか考えられない。

こういう普通の日常では考えられないことに思いを馳せるのも、実にこの句あつてのことである。「来世もまた女」は尤もなこと。「ほぼづきを含み」によく適う言葉だ。振り返ってわが身として考えると、来世も「男」だろう。

汗かきて声を投げ合ふ電工夫

金山 雅江

住宅地を外れた道路。今しも架線の取付工事の最中だ。高い電柱に登っている電工。少し離れた所では、別の電工夫が作業している。お互い大きな声で確かめ合う。路上では、旗を持った電工が道行く人の保身を誘導している。「声を投げ合ふ」がこの句の眼目だ。それは危険と暑気への対策だろう。盛夏の日中のことである。上五の「汗かきて」

に、工夫の顔がアップされる。今しもその下を通る作者の胸中には、電工夫への労いの思いが過るのだ。

三伏や女人埴輪の腰の張り

矢口 笑子

日本の古代は、古墳、弥生、縄文と時代を遡る。埴輪は古墳と共に残っているものが多いが、弥生土器にも見られるという。ここにある「女人埴輪」は、所謂「土偶」のことではなからうか。眼や腰は大きく、手足は短い。この句、博物館での所見か。一年で最も暑いという「三伏」の頃である。人体とは思われない抽象化された土偶を前にして、「腰の張り」という「土偶」の要点に視線を当てた作者の表現はみごとだ。

白鷺の孤高ガラシヤの忌なりけり

神田 恵琳

細川ガラシヤの忌日は四一七年前の七月十六日。三十六歳だった。ガラシヤは明智光秀の娘。関ヶ原の役を前に、東軍に参加した大阪在住の諸将の家族を人質にする、という石田三成の要求をガラシヤは撥ねのけ自刃する。これらの背景は周知の通り。彼女はキリシタンだった。

「白鷺」は季語としては三夏に入るが、初秋の頃も変わらず見かける。純白の長軀をすっと立てて止まっている姿は正に「孤高」である。ガラシヤ忌との取合せが際立つ。